The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

| | |
|---|---|
| Title | 深層心理学的観点からの「視点の深化の過程」に関する研究-芥川龍之介「杜子春」より- |
| Author(s) | 石川, 友香 |
| Citation | 大阪大学教育学年報. 2003, 8, p. 211-222 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://doi.org/10.18910/8782 |
| rights | |
| Note | |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

大阪大学教育学年報 第8号（2003年）
*Annals of Educational Studies* Vol.8


# 深層心理学的観点からの「視点の深化の過程」に関する研究
## —芥川龍之介の「杜子春」より—

石 川 友 香

**【要旨】**
筆者がこれまで論じてきた「視点の深化の過程」は、障害児を育てる母親の経験を語ってもらうなかで見出されたものであり、それゆえに比較的「意識」に近いところで生じていた過程について論じていたと考えられる。しかしこの「視点の深化の過程」は、意識に近い水準だけではなく「無意識の水準により近い」ところにも生じ得る過程ではないかと仮定し、その様子は文学作品の分析を通じて見出されるのではないかと考えた。そこで、本論文においては芥川龍之介の「杜子春」をとりあげて、この物語を深層心理学的な観点、特に主人公とイメージとの対話（折衝）という観点から論じ、そこに描かれている「視点の深化の過程」について考察した。さらに作者である芥川についても言及し、この物語が描かれた背景やこの物語の中に芥川が意識せずに表現してしまっていることについて深層心理学的な観点から論じるとともに、この物語の中に見出させる「視点の深化の過程」は芥川自身の内的体験そのものだったのではないかと考察した。

## 1．はじめに

筆者はこれまでに人が自分自身の内面により深く関わっていくなかで両極的な考えを抱くようになる過程を「視点の深化の過程」として捉え、そのあり方を障害児を育てる母親の経験を通して示してきた。そして、「視点の深化の過程」とは「 Ⅰ 考え方が変わるようなある出来事が生じる Ⅱ その出来事がきっかけとなって以前とは違う考えが生じてくる Ⅲ 以前とは違う考えがさらに発展する Ⅳ Ⅰが生じる以前の考えとそれとは違う考えの両方が併存する Ⅴ 一方の考えが内に存在することを意識した上で他方の考えを自らの意志で選択すると同時に、また新たな視点の深化の過程の出発点に立つ」という螺旋状の円環的な一連の過程と再定義した（石川 2000, 2002）。

しかしながら、これまで筆者が扱ってきた「視点の深化の過程」は、その個人の「考え」を中心に扱っているために、いわば「意識」に比較的近い水準での「視点の深化の過程」とも言える。この「視点の深化の過程」が、人の心の構造、つまり意識・（個人的・普遍的）無意識のあらゆる水準に渡って生じうる過程であるとするならば、これまで筆者が扱ってきた水準よりも深いところ、つまり、人の意識が及びにくい「無意識の水準により近い」ところでもこの過程は生じていることになる。

そこで本論文においては、「無意識の水準により近い」ところにおいてもみられるであろう「視点の深化の過程」を扱って、その現れ方を論じていきたいと思う。

## 2．文学作品の研究の意義について

本論では「より無意識の水準に近い」ところで生じているであろう「視点の深化の過程」の様子を、ある一つの文学作品の中に描かれている「視点の深化の過程」を論じることによって見ていこうと思うが、ここで深層心理学的分野における文学作品の研究の意義ということに関して、ごく簡単にではあるが触れておきたい。Jung（1921）は文学作品というものは、ある一個人の作り手（作者）によって作り上げられたものであるために、もちろんその作者個人の喜び・苦悩・願望などが表現されていたり、また作者が意図的に作中にモチーフを盛り込んだりすることもあろうが、それだけではなく作者の無意識の中から湧きあがってきた発想なども当然存在しているのであり、それは個人を越えて他の人にも共通することを表現しているものであると述べている。そしていわゆる名著といわれる作品においては、いわば集合的無意

識の諸内容を作品の中に描き出しているのであり、それゆえにその時代だけではなくその後世においても大きな影響を及ぼすこともあるのだが、これらの作品において描かれたことがらの真の意味を作者が完全に意識しているか、といえばそうでもないのであるとも述べている。

このように文学作品を深層心理学的な観点から分析することは作者個人を分析することにとどまらず、多くの人に共通する無意識的内容の分析にも通じることにもなると考えられる。それゆえに文学作品の分析を通してその中に描かれている「視点の深化の過程」を見出していくことは、まさに「無意識の水準により近い」ところに生じた「視点の深化の過程」を扱うことになろうと考えられる。

## 3.「杜子春」(芥川龍之介)に関する研究について

今回の研究で取り上げる文学作品は芥川龍之介の「杜子春」である。この作品を選んだ理由には、第一に、作品には主人公が「魔性」をはじめとする様々なイメージと対峙する様子が描かれているため、これらの分析を通して、比較的無意識に近いところに生じた「視点の深化の過程」を見いだせることが可能なのではないかと考えたからである。また、芥川龍之介は大正期の日本文学界を代表する作家であり、「杜子春」は彼の児童文学作品の中で最も有名な作品の一つであるため、作者・作品ともに文学界をはじめとする様々な分野での研究がなされているが、深層心理学的な観点から論じられているものは、ほとんどないからである。

以上のような理由から本論では芥川の「杜子春」を深層心理学的な観点から論じていこうと思うが、まず始めに主に文学的な観点からこれまでに論じられてきたことを概観しようと思う。

芥川龍之介の「杜子春」は、大正九(1920)年七月に児童学術雑誌『赤い鳥』第五巻第一号に発表された童話作品である。この作品は全くの芥川のオリジナル作品ではなく、中国唐代の伝記「杜子春伝」を踏まえて書かれたものであるが、原典と芥川の「杜子春」とどの点がどれだけ違うのか、ということに関しては、研究者の間でも様々な見解がある。

細かい点においては、成瀬(1989)が指摘しているように、最初の場面設定の相違(原典では「長安」であり、芥川の初出の「杜子春」でも「長安」であったが、後に「洛陽」に変更される)や、呂洞賓作の漢詩の挿入(原典なし)、鉄冠子という仙人の名(原典なし)などがあげられている。しかし、特に原典との相違で多くの学者が注目しているのは、杜子春が仙人を志すことを決めた動機と、結末の部分である。しかしながら、原典の「杜子春伝」に関しては、研究者の間でも細かい部分の解釈の違いが存在していたり(内山 1985、西岡 1984)、原典(漢文)の誤読と思われる解説や芥川の「杜子春」の強い印象の影響もあって原典の文脈が歪められた解釈がされているという指摘(西岡 1984)もあるため、二つの作品を比較して相違点を厳密に論じるのは難しい。

しかし、ここでは原典と芥川の「杜子春」の違いを厳密に論じることが目的なのではなく、「杜子春」が「芥川の作品」であることを示すことが目的であるので、二つの作品の内容の違いを大まかに示すことだけでも十分であるように筆者には感じられる。以下にその違いについて言及した解説を、物語のあらすじの提示も兼ねて引用したいと思う。

『杜子春』は中国の伝記『杜子春伝』を踏まえて、童話化したものである。杜子春が仙道を志して、仙室内に試験を受け、喜、怒、哀、懼、悪、欲の六情には負けなかったが、最後に「愛」の試験に落第するというところまでは原文と違わない。それは七情のうち、「愛」の執着がもっとも強いことを語るのでもあるが、師たる仙人はそのために仙薬をつくりえず、杜子春もまた仙人になりそこなってともに失意嘆息するというのが原典の主旨である。これに対して芥川は、仙人になりたいために、父母の苦しみを黙ってみているような人間ならば、即座に「命を絶ってしまおう」と思ったと、仙人に云わせている。仙人となって愛苦を超越するより、平凡な人間として愛情の世界に生き、のどかな生活をする方が、はるかに幸福だと、杜子春とともに作者も考えたのである。平凡な人情、通俗的な道徳を肯定しているようだが、そこには原作にない、この作品の倫理的な美しさがある。(吉田精一「『蜘蛛の糸・杜子春』について」)

多少補足すると、吉田は「杜子春が仙道を志して」と述べているが、研究者の間では芥川の「杜子春」では、貧乏になってしまった杜子春は老人（仙人）が与えたお金を二度は受け取ったが、三度目に「人間の薄情さにに愛想が尽き」たと言って断り、「だから仙人になりたい」と仙道を志すのに対し、原典の「杜子春伝」は老人（仙人）のお金を三度受け取り、その老人の恩に報いるためにも、最後のお金で身辺整理をした後、老人（仙人）の所に向かうという違いがあると論じられている。

また、主旨に関しても原典においては、「施術者と被術者が二人一組になって長生の術を求め、施術者によって与えられる禁忌を被術者が破ることによって術がこわれる」という印度説話に由来するモティーフの存在やこのような長生術と西洋の錬金術との類似（西岡 1984）が指摘されているが、芥川の「杜子春」ではそれよりも倫理観・道徳観のほうが取り上げられており、多少趣が異なっているような印象を受ける。そして、禁忌を破る状況も異なっており、芥川の「杜子春」に関しては上の引用の通りであるが、原典では、実は杜子春は女に転生しており、夫によって子どもが石にぶつけられるのを見て思わず声を発した、という話になっている。最後の部分においては、原典も芥川の「杜子春」も元の世界に帰ってくるのは同じであるが、原典の方では杜子春の失敗により、老人（仙人）は仙薬を作ること（煉丹術）に失敗し、杜子春は仙人になれず、落胆して元の世界に戻ることになる。杜子春と老人（仙人）の別れの場面においても原典では「私の薬はもう一度煉ることはできるし、あなたの身体もなお世間に受け入れられるでしょう。しっかりおやりなさい。」（内山 1985）という文で終わっており、この点においても芥川の「杜子春」とは大分趣が異なっているといえよう。

実際に芥川自身も初出誌の付記に「これは杜子春の名はあつても、名高い杜子春伝とは所々、大分話が違つてゐます。」（菊池他　1985）と述べていたり、河西信三宛の書簡に「拙作『杜子春』は唐の小説杜子春伝の主人公を用ひをり候へども、話は2/3以上創作に有り之候。」（菊池他　1985）と記している。この点に関しては、「原型に取材した創作としてうちだされている」（滑川 1956）というように「杜子春」を芥川の創作として認めている評価や、さらには「芥川龍之介は、果たして『杜子春伝』の原文を読んでいるのだろうか。」（内山 1985）という疑問さえもあり、「杜子春」を芥川自身の作品として捉えることができるという意見が大多数である。

しかし一方で「原典も愛の尊厳を提唱するモチーフを持っている」という意見（伊東 1998）や「純粋に両者の対比の上に立ってみると、人間観と文章の差異がごく表面的に認められるだけで、原典からの文学的成長、すなわち芥川自身の内部よりする人間や人生の再現といった独自な創造力が少しも働いていない。」（塚田 1956）という意見もある。

このように、研究者の間でも意見が一致していない状態ではあるが、先述したように原典の「杜子春伝」と芥川の「杜子春」が全く同じ物語ではないのは一目瞭然である。確かに、芥川は原典の「杜子春伝」を踏まえて「杜子春」を書いたのであるから、原典のモチーフを意識的にも無意識的にも取り込んでいるには違いない。しかしながら、芥川独自の発想も盛り込まれているもの事実であり、それゆえに本論で「杜子春」を「芥川の作品」として扱って論を進めても問題はないように感じられる。

ところで、芥川の「杜子春」の評価においては、童話という観点からの評価や、修辞の問題、芥川が無意識に表現したもの、作品が書かれたときの時代背景などに言及した論文もある。滑川（1956）は芥川の「杜子春」について「芥川の児童文学作品中もっとも高く評価していい名作といつていいだろう。中国の伝承的な話篇で、原型はひじょうに残酷なものだと言われている。（中略）地獄の呵責にあう箇所も、童話的で異常なつつこみかたをしていないのは、年少の児童を対象として意識したからだろう。人間愛を謳歌する結末にみちびいたのも、美しい児童文学を作ろうとする意図があつたからにちがいない。構成も緊密で内容も健康な作品であるが、芥川自身をさいなむ孤独感がつきまとつている。」と論じている。さらに、滑川（1956）は芥川が「杜子春」を書いたときは、第一次世界大戦後の「デモクラシーの明るい展開」の時代であり「『赤い鳥』を中心とする童心主義児童文学の開花期にふさわしい地盤ができていたのであるが、それとともに物価の騰貴・労資の対立もしだいにめだつて来る」時代であることに触れ、「労働争議の激増・米騒動の現実と社会主義思想の発展が、かれのいだいていた懐疑をいつそう深くし、人間愛について、道徳についてなやませ、ユウウツの影を濃くさせていく。」という状況であったことが論じられている。また宮本（1929）は芥川が「あらゆる孤獨な小ブルジョア的インテリゲントのやうに『善悪の彼

岸』に立つことを愛してゐた」が結局はそれは為し得ずに終わり、「杜子春」などの童話から「いかに氏が一時代の一階級の道　律をこえることの出來なかつたモラリストであつたかの證左となるであらう。」と論じている。さらには、「杜子春」の最後の場面で主人公杜子春が母を呼ぶ声に関して、芥川の「母を呼ぶ真実の声」という視点から論じている論文も見られる（平岡 1982）。

以上のように芥川の「杜子春」は文学研究や比較文化研究の分野において様々な側面から論じられているが、またそれとは異なった分野において独自の観点から「芥川研究」が行われている。その中でも特に重要だと思われるのが病跡学の分野であろう。

病跡学とは、「傑出した人物における精神生活と創造活動の関連を精神医学ないし精神病理学の立場から解明しようとする」学問（加藤編 1993）である。そのため、本論においても病跡学の立場から論じられた芥川像を通じて芥川の「杜子春」を眺めるのもとても意味のあることであろうと思われる。以下においてはこのような観点から論じていこうと思う。

## 4．芥川龍之介に関する病跡学からの研究について

ある作品に描かれた世界をより深く探求しようとするときには、その背景にあるもの、つまり作者自身の分析が重要となってくる。特に本論では、芥川が「杜子春」を通して描いた世界を見ようとしているため、どうしても芥川自身のこと、その中でも特に芥川の場合はこの作品が描かれたときの彼の精神的な状態に触れておく必要があるだろう。この点に関しては病跡学的観点から、芥川の人生全般に渡って実に詳細な分析がなされている研究がいくつかあるが、本項では芥川が文学作家として活躍していた時期に焦点を絞ってごく簡単に触れていきたいと思う。

井上（1981）と福島（1983）は、芥川の創作時代を五期に分けて彼の病気と創造の関係を論じている。以下においては福島（1983）が論じている内容を筆者がまとめたものと、創作活動以外で芥川の個人史上特に重要だと思われた出来事（関口 1992、浅野他編 2000 を参照した）をごく簡単に示す。

Ⅰ期（大正3-7年：23歳～27歳）

創作に関しては文壇に登場し始めた時期であり、執筆依頼も多く旺盛な創造力を発揮している。「羅生門」、「鼻」、「芋粥」、「地獄変」などの初期の代表作が書かれた。作品は古典に題材をとり知的で技巧的な構成をとったものが多く、特に死・老年などのテーマが多い。「忠義」や「二つの手紙」などには病的なもの思わせる内容はあるが、はっきりと精神病的な体験に基づくものとは思われないものである。

【大正5年7月に大学を卒業、同年12月海軍機関学校の英語の嘱託教官として就職。同月、師夏目漱石が死去。かなりの衝撃を受けている。大正7年結婚、新居を構える。】

Ⅱ期（大正8-9年：27歳～28歳）

旅行・創作・交友などに活躍し、心身共に活発・健康に見えた時期。手紙・日記などにも神経衰弱や不眠など不調を訴える記録は残っていない。

しかし、作品の中には精神病理学的に見ると分裂病的[1]な体験と見られる記述が多い。たとえば、「妖婆」（人物誤認・妄想知覚・衝動行為の内容あり）、「影」（自己像幻視・妄想的意識性・実体的意識性・妄想知覚の内容あり）、「奇妙な再会」（幻聴・機能幻覚・体感幻覚の内容あり）などがあげられる。これらの記述は、「当時の精神医学書などを読んだだけでは到底描き得ないような体験が正確に描かれている」内容であり（井上 1981）、芥川自身の体験が先行していたと推測されている。

【大正8年に大阪毎日新聞社に入社、創作専従の生活に入る。大正9年4月、長男誕生。大正9年7月頃より河童の絵をしきりに描くようになる。】

Ⅲ期（大正10-11年：29歳～30歳）

健康状態に衰えがみえ、心身ともに不調で睡眠薬の量も増加。作品の中においては病的体験の記述はなく、「藪の中」、「トロッコ」などが描かれている。

【大正10年7月頃から体調を崩し病臥することが多かった。大正11年春には関西や九州に旅行に行っている

が、秋頃から健康が著しく悪化。11月、次男誕生】

Ⅳ期（大正12-14年：31歳～33歳）

健康や創作意欲に関しては小康状態といえる。執筆内容に変化が見られ、アフォリズム aphorism・批評・評釈の執筆が多くなるとともに、小説では筋もない「私小説」のような作品（身辺雑記風のもの「保吉の手帳」、自伝的・告白風のもの「大道寺伸輔の半生」）などが書かれ始めている。しかしこの時期の芥川は自分の全てをさらけ出して告白しているのではなく、「秘密」を保持することができていた。

【大正12年9月、関東大震災に遭遇。家族・家屋ともに無事。震災直後の混乱の中で、隣近所の人々と自警団員も務めている。大正14年7月三男誕生。同年11月、出版に関する問題を巡ってよからぬ噂が流れ、芥川は何かと心を痛めていた。】

Ⅴ期（大正15＜昭和元＞年-昭和2年：34歳～35歳）

実生活の上では「神経衰弱」が高じ、不眠が続くばかりでなく妄想知覚・妄想気分・被害妄想・追跡妄想・人物誤認・不安感・恐怖感に悩み、圧倒されていた。これは精神病理学的に見ると、疑いもなく分裂病的な世界であり、その的確にして生き生きした描写を彼の最後期の作品群の中に見出すことができる。

「玄鶴山房」「点鬼簿」、「蜃気楼」、「歯車」、「或阿呆の一生」などは私小説要素（と病的要素）をもっている作品であり、精神医学的観点からは病者の体験の生々しい描写とみえる作品群である。これらの作品としての評価は二つに分かれているが、多くの批評家はこの作品群に高い評価を与えている。このことは、これらが単なる体験の報告やメモではなく、なお確かな構成力や技巧を備えた「作品」であることを証明している。また、この最後の年に、内容は奇想天外でありながら、見事な構成をもった「河童」のような、「作品」が生み出されたことにも驚かされる。

【大正15年、前年末から年始にかけて「神経衰弱」が昂じ「不眠症」に陥る。昭和2年1月には義兄（姉の夫）が自殺。芥川はその後、義兄の借金などの処理のために奔走を余儀されなくされ、心身ともに衰耗させてしまう。4月頃から心中を試みようとしたりすることもみられてくる。7月、自宅にて服毒自殺】

また、福島によると当時の「神経衰弱」という診断は、現代でいう神経症的状態から精神病的状態までの幅広い諸症状を含んでおり、芥川の場合はⅠ期及びⅢ期は神経症的症状の範囲、Ⅴ期において初めて精神分裂病的状態が露わに示されているという。また、彼の診断に関しては、「非定型」的、より正確には「不全型」の精神分裂病だろうと述べている。また、芥川の実母も彼が生後7ヶ月の時に精神分裂病を発症していることも、彼の生育歴に大きな影を投げかけただけではなく、発症に関する不安・恐怖感を彼が抱かざるを得なかったということに大きく影響しているといわれている。

本論で取り上げる「杜子春」は、上記の分類でいえば「Ⅱ期」、つまり実生活では健康に過ごしていたにもかかわらず、精神病理学的な観点からみると作品中には「分裂病的な体験」と見られる記述が多い時期に書かれた作品である。確かに芥川の「杜子春」においては、同時期の他の作品に見られるような彼の分裂病的体験から生み出されたと思われる明らかな描写はない。しかしながらそのような体験の影響をまったく受けていない作品であるとも言い切れないところもあろうかと思われる。

この点に関する考察は後に論じるとして、このような病跡学的な観点からの見解を念頭に置きつつ、次項では、芥川の「杜子春」の分析に入ろうと思う。

## 5．深層心理学的観点からの「杜子春」（芥川龍之介）[2)]に関する研究について

物語の舞台は唐の都である。主人公の杜子春は元は金持ちの息子だったが、財を使い果たしてかなり貧しい暮らしをしている。ある春の日暮れに都の西の門の下でぼんやりと空を仰いでいると、片目眇（すがめ）の老人が杜子春の前で立ち止まり、杜子春に「お前は何を考えているのだ」と言葉をかける。杜子春が今晩寝る場もなく困っていると答えると、その老人は、今夕日の中に立って地面に映った自分の影の頭の部分に当たる場所を夜中に掘ると黄金が埋まっている、と伝えて姿を消す。杜子春がその老人の言うとおりにしたところ、宝の山を得て一晩で大金持ちになる。しかし杜子春はそのお金で贅沢な生活を続けたため、とう

とう三年目の春に元の一文無しになってしまう。そこで再び以前と同じ場所でぼんやりと空を眺めて途方に暮れていると、また片目眇の老人がどこからかやってきて「お前は何を考えているのだ」と声をかける。杜子春は恥ずかしくてすぐには返事ができなかったが、老人は親切そうに何度も繰り返し尋ねるので、今晩寝る場所もなく困っていると、恐る恐る返事をする。すると老人は、今夕日の中に立って地面に映った自分の影の胸に当たる場所を夜中に掘ると黄金が埋まっている、と伝えてその場を去っていった。そうして杜子春は再び宝の山を得たのであるが、相変わらず贅沢な生活を繰り返し、また三年で一文無しになってしまった。そしてまた杜子春は同じ場所で片目眇の老人に「お前は何を考えているのだ」と問われる。杜子春がまた今晩寝る場所もなく困っていると答えると老人は、今夕日の中に立って地面に映った自分の影の腹の部分に当たる場所を今晩掘ると黄金が埋まっている、と伝える。だがその言葉を遮って杜子春は「お金はもういらない」と言い、その理由として、贅沢に飽きたのではなく金持ちの時には何かとすり寄ってくるが、貧乏になると途端に踵を返す「人間に愛想が尽きた」という。そのため、もう一度大金持ちになっても何もならない気がし、だからといって貧乏しても安らかに暮らしていくこともできないので、おそらく仙人であろう老人の弟子になって仙術の修行がしたいという。片目眇の老人は暫くは黙って何か考えているようだったが、やがてにっこりと笑って自分は確かに仙人であることを告げ、「始め（ママ）お前の顔を見たとき、どこか物わかりが好さそうだったから、二度まで大金持ちにしてやったのだが、それ程仙人になりたければ、おれの弟子にとり立ててやろう」と快く願いを受け入れたのであった。

まず、片目眇の老人（仙人）が杜子春に「影の頭の部分」を掘ると宝の山があることを教えるということについて考えたい。仙人とは、道教における不老不死をはじめとする様々な法を修め神変自在の法術を有する人である（新村編 1995）。道教では人体を「丹田」と呼ばれる三つの部分に分け、上丹田は脳の中（前額部中央）、中丹田は心臓の近く、下丹田は下腹部（臍の下）にあると考えられていた。そしてそれらは霊薬（仙薬、不老不死の薬）を煉る場所と考えられており、また瞑想の際には思念を集中させる場所とされていた。

湯浅（1995）によると、道教における瞑想の訓練における意味の一つは、普段は外界に向いている意識の働きを上丹田（前額部中央）に思念を集中させることによって内面へと向けかえることであるという。この訓練を重ねていくと、その流れが中丹田を通って下丹田に到達し、そこにある「気」（つまり心的な力）の性質がこれまでとは違う性質（「陰」から「陽」）に反転する。それによって「中丹田のはたらきを活性化し、さらに上丹田で休眠状態にある潜在的本性の光を目覚めさせていく」（湯浅 1995）ということである。また道教においては、心と体はとても深い関わりがあると考えられているため、そのような「気」を変容させる訓練を通じて、「無意識の領域に潜在する創造的ですぐれた潜在能力を現実化し、人格の高い変容状態に達することができる」（湯浅 1995）と考えられている。

物語においては、まず杜子春の地面に映った影の頭の部分に当たる場所に、そして次に胸の部分に当たる場所に「宝」があると仙人は伝えている。しかしながら、地中から出てきた財宝は本当の「宝」なのであろうか。確かに、杜子春が手にした「宝」は、現世において一時（物語では三年間）の贅沢を味わうだけの財宝のようにもみえるが、しかし杜子春は何も考えずにただ豪遊したのではなさそうである。杜子春は豪遊しその大金を使い果たすことを通じて、「人間の影」に少しずつ気付いていく。それが「影の中にある宝」の正体であろう。それは、一度目と二度目の杜子春の返答の様子に微妙な変化が生じていることから窺える。そして、遂に三度目に仙人が現れたとき杜子春は「影の中にある宝」は必要がない、「人間に愛想が尽きた」ために仙人になりたいという。つまり、彼は人間としてこの世の中で生きていくのではなくて、仙人という人間を越えた存在になりたいと願う。確かに、この杜子春の願いは「厭世的」「回避的」であるという批判もあるのだが、むしろ筆者は杜子春がこれまで生きてきた世界に愛想を尽かせたことによって、今までの世界とは全く異なった仙人の世界に目を向け、その世界で生きたいと願うことができたと捉えたい。もし杜子春の願いが単に「厭世的」「回避的」なものであったならば、後に生じる数々の苦行に耐えることなどできなかったのではないかと思うのである。

ここでの杜子春の様子を「視点の深化の過程」の観点から眺めれば、杜子春は貧乏になることによって仙人に出会い、仙人からもらった影の中の財宝を使うことを通じて（Ⅰ　考え方が変わるようなある出来

事が生じる)、それまでは意識することのなかった現世における「人間の影」に気付くことになり、今棲む世界とは全く違う、人間という存在を越えた不老不死の仙人になりたい（仙人の世界で生きたい）と願うようになる（Ⅱ　その出来事がきっかけとなって以前とは違う考えが生じてくる）と考えられよう。

二人は峨眉山に行くが、老人は出かけてくるので帰ってくるまでそこで待っているように杜子春に告げる。老人は、自分の留守中に色々な魔性が現れて、杜子春をたぶらかそうとするだろうが、決して声を出してはいけない、一言でも口を利いたら仙人にはなれないと覚悟するように、と言い残して去っていく。

原典の「杜子春伝」では杜子春は「崋山」に「歩いて」行ったとなっているが、芥川の「杜子春」では「峨眉山」に「仙人とともに飛んでいく」となっている。この違いについては、距離の違いだけではなく、芥川が片目眇の老人（仙人）のモデルにしたと思われる人物が峨眉山で修行していたと伝えられているためという説（成瀬　1989）もあるのだが、筆者はそれ以上に「峨眉山」という場所は現世とは地続きでない世界、いわば対極的な世界を象徴する場所としてとらえたい。また、杜子春が一言も口をきいてはいけないと言われた「魔性」というものに関しては、本論では自律的な「イメージ」として扱って論じていきたいと思う。

ところで物語では、杜子春は仙人から魔性に対して「一言でも口をきいてはいけない」という禁忌を与えられている。これは修行として科せられた単なる「課題」ということよりも多くの意味を秘めているように感じられる。魔性というイメージに対して口をきかないということは、先述した道教の瞑想という観点からみれば、意識を内面に向けようとする行為を邪魔しようとするイメージ（邪念）に惑わされないためとも考えられる。また、イメージとのやりとり（抽象的な対話、折衝 Auseinandersetzung ）という観点からみれば、最初に現れてくるような目的や意味が不明なイメージが意識の中に現れてくるのを許容しつつ、対話する相手の正体を見極めるために重要な態度（老松 2000）でもあると考えられる。

しばらくすると「そこにいるのは何者だ」と叱りつける声が突然聞こえる。もちろん杜子春は答えずにいると「返事をしないと立ちどころに命はないものと覚悟しろ」という声がして、虎と白い大蛇が現れ暫く睨み合いをし、そして同時に杜子春に襲いかかってくる。が、次の瞬間には両者とも消え去ってしまう。次には、激しい雷雨に見舞われ、真っ黒な雲の中から現れた真っ赤な火柱が杜子春の頭に落ちかかるが、次の瞬間には元の晴れ渡った夜空が広がっている。杜子春は、これらは仙人の留守を（ママ）つけ込んだ、魔性の悪戯に違いないと思って、漸く安心して額の冷や汗を拭いながら再び岩の上に坐り直す。

杜子春は、峨眉山という場所で恐ろしい「イメージに圧倒される」のだが、沈黙を守りこれらを「魔性の悪戯」とはっきりと感じている。恐ろしく破壊的なイマジネーションに圧倒されるような状態であるときに「仙人になる」という目的を繰り返し確認しつつ、それに必要な態度、「一言でも口をきかない」ということを自ら意識的に選択し実行し続けることは、「いたずらに破壊的なイマジネーションが溢れ出してくるのを強力に防ぐ」ことでもあり、杜子春の自我にとって「とてもたいせつな守りとして機能している」（老松　2000）ことにもなっているのである。

このような峨眉山での体験はこれまでの現世とは全く違う「体験」であったに違いない。現世では、杜子春は「元は金持ちの息子だった」が「財を使い果たして貧しい暮らしをしていた」人物である。何か目的を持って生きていたというよりは、おそらく目的もなくただ何となく日々を過ごしていたであろう。そのような杜子春が、峨眉山という現世とは地続きでない、いわば現世とは対極的な場所で「仙人になる」という目的のもと、次々に襲ってくるイメージと対峙し、自ら意識的に「口をきかない」という態度を選択し実行している。これを「視点の深化の過程」という観点から眺めれば「Ⅲ　以前とは違う考えがさらに発展する」という状態に相当するように感じられるが、ここでは「仙人になりたいという考え（「以前とは違う考え」）」が「単なる願望として終わるのではなくイメージとのやりとり（折衝 Auseinandersetzung ）を招くようなものとなっていく（「さらに発展する」）」という状態といえよう。

次には、三叉の戟を手にした神将が現れその戟先を杜子春に向けて「こら、その方は一体何物（ママ）だ。…さぁ命が惜しかったら、一刻も早く返答しろ」と言うが、杜子春は黙っていたため、神将は怒って杜子春を突き殺してしまった。

ここでも杜子春は自らの意志をもって頑なに対話を拒んだために、神将（というイメージ）に殺されることになってしまう。老松（2000）はアクティヴ・イマジネーションにおいて、自我がイメージに対峙する際に「何か行動を起こすにせよ、暫時じっと見守るにせよ、選択、決断、実行においては自我の力量が問われる」と述べている。ここで現れてきた神将（というイメージ）は、杜子春の自我がさらに深いレベルでのイメージとの対話ができる強さを有しているのかということを試す存在であり、杜子春は神将の脅しにも屈せずに黙っていたためその自我の強さが認められたと考えられる。その結果杜子春は殺され、「魂」となってさらに深いところへと降りていくのであるが、これは「個人という次元を越えて」さらに深い「元型的なイメージとの対話」を可能にすることでもある。

杜子春は死に、彼の魂は地獄へと下りて行き、森羅殿という閻魔大王がいる御殿にやってきた。杜子春は閻魔大王に峨眉山の上に座っていた理由などを尋ねられるが、ここでも決して口を開かなかった為に閻魔大王の怒りをかい、地獄のあらゆる責苦に遭わされることになる。しかし杜子春は我慢強く、じっと歯を食いしばったまま、決して口を開かなかったのであった。

「魂」という存在になった杜子春は閻魔大王に会うが、ここでも自らの意志で口を開かなかったために「地獄の責苦」という恐ろしいイメージに圧倒され、自らの身をもってそれらを「体験」している。このような中でも杜子春は決して口を開かず、自ら意識的に選択した態度を維持し続けていたのである。

この様子に業を煮やした閻魔大王は、ついに畜生道に落ち馬の姿となっていた杜子春の父母を連れてきて、杜子春の目の前でその二頭の馬を鉄の鞭で打ちのめし始めた。杜子春が必死になって、仙人の言葉を思い出しながら堅く目をつぶっていると、彼の耳に、杜子春が幸せになれるのなら、私たち（両親）のことは心配せずに、大王がなんと言おうと言いたくないことは黙っていたらいい、という母のかすかな声が伝わってくる。杜子春は思わず目をあき、傷つき倒れ込んでいる一匹の馬が悲しそうに彼の顔へ、じっと目をやっているのを見た。そして、金持ちの時には何かとすり寄ってくるが、貧乏になると途端に踵を返す人とは違う、母親の有り難い志、健気な決心を感じ、仙人の戒めも忘れて、転ぶようにその馬の側に駆けより、半死の状態の馬の頸を抱いてはらはらと涙を流しながら「お母さん」と一言叫んだのであった。

一向に口を開かない杜子春に対して、閻魔大王は「最後の手段」を用いて杜子春を試そうとする。その「手段」は、「畜生道」に落ちている「杜子春の父母」を杜子春の目の前で「鉄の鞭で打ちのめす」という残忍な手段ではあるが、閻魔大王の真のねらいはその光景に杜子春がどのような態度をとるか、すなわち黙り続けているのか、それとも誰かに口をきくのか、ということだったと考えてよかろう。

杜子春は両親が痛めつけられている様子を目の当たりにしても、仙人の戒めの言葉を思い出しながら堅く目をつぶって耐えていたが、母親から伝わってきた言葉に対してついに口を開く。しかし、杜子春がとったこの行動は、情動に振り回された結果生じてしまったものでは決してない。杜子春は、黙っていたらいい、と言われたのに敢えて口を開いたのであり、これは自分の心の中に沸き起こった情動をきちんと「感じ」た上で、自らその情動に身を任せて行動するという「選択」をしたと考えられる。

ここでの杜子春は、父母が痛めつけられている姿を目の当たりにし、一刻でも早く口を聞いてそれを止めさせるべきなのか（しかしその結果仙人にはなれず、以前と同じ人間の世界に戻り、以前と同じような生活をしなければならない）、それとも人間を越えた存在である仙人になるという目的のために黙っているべきか、という二つの思いに引き裂かれそうな状態であったに違いない。これは「視点の深化の過程」でいえば「Ⅳ　Ⅰが生じる以前の考えとそれとは違う考えの両方が併存する」状態に相当するといえよう。

その声に気がついてみると、杜子春はやはり夕日を浴びて、峨眉山に行く前と同じく、洛陽の西の門の下にぼんやりと佇んでいるのだった。片目眇の老人は微笑みを含みながら、杜子春にとても仙人にはなれないだろうと告げるが、杜子春は「なれません。なれませんが、しかし私はなれなかったことも、反って嬉しい気がするのです」と答える。「いくら仙人になれたところが、私はあの地獄の森羅殿の前に、鞭を受けている父母を見ては黙っているわけには行きません」という杜子春に対して、老人は「もしお前が黙っていたら、おれは即座にお前の命を絶ってしまおうと思っていたのだ」と言う。

仙人の「もしお前が黙っていたら、おれは即座にお前の命を絶ってしまおうと思っていたのだ」という言葉から、杜子春の「選択」は正しいものであったことが分かると同時にここでの選択を誤ることはまさに致命的なものであったことが分かる。

最後の場面に関しては、杜子春が言葉を発せずに愛の試験に「合格」したとしても仙人にはさせず、死をもって罰しようとしたという仙人の「エゴイスト」という批評もある。しかし、筆者は仙人というのは、杜子春が最も重要な宝を獲得するために必要な「修行」（それはイメージとの対話における選択を誤れば命さえも奪われるような「修行」）へと誘う存在だったように感じられるのである。

そして老人は、今後どのようになりたいか、と問うが、杜子春は、今までにない晴れ晴れとした調子で「何になっても、人間らしい、正直な暮らしをするつもりです」と答える。老人は、その言葉を忘れないように、そしてもう二度と彼の前には現れない、と言って去ろうとし、最後に老人がもっていた一軒の家と畑を杜子春にやろう、と付け加えて去っていったのであった。

杜子春は峨眉山に行く前と全く同じ場所にいる。周りの世界も変わっていない。しかし、杜子春の心の中は変わっている。そして、峨眉山に行く前には厭っていた「この世」を自らの意志で生きることを老人に伝えている。

杜子春は仙人になるという目的のもと数々の苦痛にも耐え、自ら意識的に「口をきかない」という態度を選択し続けていたが、最後の場面では、口を開いたら元の人間の世界に戻ってしまい仙人になれないということを確かに意識しつつも、その上で自らの意志で口を開く、つまり仙人にはなれずに元の人間の世界に帰ってくるという選択をしたのである（「一方の考えが内に存在することを意識した上で他方の考えを自らの意志で選択する」）。その結果以前と全く同じ場所に戻ってきたが、杜子春の内面は変化しており、また何か紆余曲折のあるかもしれない今後の生活を新たなる気持ちで生き抜こうと決意している（「また新たな視点の深化の過程の出発点に立つ」）。これは「視点の深化の過程」という観点から見れば「Ⅴ　一方の考えが内に存在することを意識した上で他方の考えを自らの意志で選択すると同時に、また新たな視点の深化の過程の出発点に立つ」状態に相当すると考えられよう。

ところで、杜子春が仙人になるための修行を通じて得たものは、この物語の前半部分で杜子春が三回目に老人にあった際に、自分の影の腹の部分に当たる場所にあったであろう宝を得ないで断ったことと関係していないだろうか。先述したように、道教でいえば「腹部」は「下丹田」と呼ばれ、三丹田の中でも一番基礎的な部分であり最重要の部分と見なされている。この「下丹田」の「宝」に関しては、財宝ではなく「仙人になりたい」と言った杜子春は、修行を通じてそこにある「宝」を得ることができたのである。

これらのことをまとめると、主人公である杜子春は、貧乏になることによって片目眇の老人（仙人）と出会い、仙人からもらった財宝を使い果たすことを通じて（「Ⅰ」に相当）、この世で生きることを厭い仙人になりたいと思い（「Ⅱ」に相当）、その結果この世という現実世界とは全く違う、対極的に位置するイメージの世界に入り込んでいく（「Ⅲ」に相当）。そして、イメージとの対話を続けることによってさらに奥深いイメージの世界に入り込んでいくが、ついには馬に姿を変えられた両親がひどく痛めつけられる姿を見せられることとなる。そこで杜子春は父母を犠牲にまでして仙人になりたいという自分の意志を貫くべきか、それとも両親を助けるために仙人になることは諦めて元の世界に戻って元の生活を送るべきか、という引き裂かれるような思いを抱くが（「Ⅳ」に相当）、母親の声を聴き自分の意志で口を開くことを選択し、元の世界に戻ってくる。しかしながら、以前と全く同じ世界、同じ場所に戻っても杜子春の内面は

変わっており、今後はその世界で「人間らしく正直に」生きることを仙人に伝えている（「V」に相当）ということになろう。このように考えると、杜子春は「無意識の水準により近い」水準での「視点の深化の過程」を自ら生き抜いた人物だと言えるのではないかと筆者には感じられるのである。

## 6．おわりに

最後になるが、芥川が「杜子春」を通じて描いてしまっているものについて言及したい。先の「4. 芥川龍之介に関する病跡学からの研究について」で触れたように、この作品が書かれたのは「実生活では健康に過ごしていたにもかかわらず、作品中には精神病理学的に観点からみると『分裂病的な体験』と見られる記述が多い時期」である。しかし、「分裂病的な体験」の記述が見られるとされている作品の中に「杜子春」の名は挙げられていない。確かに「杜子春」では「分裂病的な体験」の明らかな記述はみられない。しかし「杜子春」の作品においては、恐ろしいイメージに圧倒されながらも確固たる自我を維持し続け、そのようなイメージと対峙することを通じて大切な何かを得ていくというような芥川の「凄まじい内的体験（分裂病的な体験）」そのものが漏れ出てしまっているように感じられるのである。

この時期に、偶然童話の執筆を依頼されたとはいえ、オリジナルな作品ではなく、多くの漢文学作品の中から「杜子春伝」を題材として選び、このような「杜子春」を創り上げたことは、全くの偶然で片づけられるのであろうか。

今の筆者には、当時の芥川が彼自身の無意識の声を聴いて「杜子春伝」を選び「杜子春」を書いてしまった、としか言いようがない。芥川は自分自身の自我の問題を「杜子春」を通じて描かざるをえなかったのであり、それを描くことによって彼自身が（一時的であったかもしれないが）癒されていたようにも感じる。また、穿った見方をすれば全くのオリジナルの作品ではないことが臨床心理でいう「枠」という守りの働きをはたしており、その「枠」があったからこそ芥川は自身の「分裂病的な内的体験」の一部始終を「杜子春」という主人公を通じて「無意識のうちに」描いてしまうことが無事にできたのではないかとも思われるのである。

本研究では、無意識の水準により近い「視点の深化」の一連の過程を芥川の一作品の中に見出したことになる。今回は芥川の「杜子春」という文学作品一例しか取り上げられかったが、他の芸術作品を通じて現れてくる「視点の深化の過程」については今後の研究課題としたい。

＜注＞

1）疾患名 schizophrenia は2002年より「統合失調症」と（日本語訳が）変更されたが、本論文では先行研究で用いられている「(精神）分裂病」という旧来の用語をそのまま用い、混乱を避けるためにも筆者も旧来の用語を用いて論じていることをお断りしておきたい。

2）論文中に引用した「杜子春」の本文は『蜘蛛の糸・杜子春』（新潮文庫　1986）によった。

＜引用・参考文献＞

芥川龍之介　1986　『蜘蛛の糸・杜子春』　新潮文庫

浅野・芹澤・三嶋編　2000　『芥川龍之介を学ぶ人のために』　世界思想社

福島　章　1983　「病跡学から見た芥川龍之介」『国文学解釈と鑑賞』48（4）　pp.169-174

Jung,C.G. 1921 *Psychologishe Typen* Rasher Verlag. 林道義訳　『タイプ論』　みすず書房　1999

Jung, C.G. Wilhelm ,R. 1973 *Das Geheimnis der Goldenen Blüte , ein chinesische Lebensbuch* Walter Verlag . 湯浅泰雄・定方昭夫訳　『黄金の華の秘密』　人文書院　1995

Hannah, B. 1981 *Encouter with the Soul : Active Imagination as Developed by C.G.Jung,* Sigo Press. 老松克博・角野善宏訳　『アクティヴ・イマジネーションの世界』　創元社　2000

平岡敏夫　1982　『芥川龍之介-抒情の美学』　大修館書店

石川友香　2000　「重症心身障害児を育てる母親の視点の深化に関する臨床心理学的研究」大阪大学大学院人間科

学研究科修士論文（未公刊）
石川友香　2002　「障害児を育てる母親の視点の深化の過程に関する一考察」『大阪大学教育学年報　第七号』pp.193-204
井上晴雄　1981　「芥川龍之介における文学創造と異常体験」『日本病跡学雑誌』22号　pp.9-16
岩井　寛　1969　『パトグラフィ双書2　芥川龍之介-芸術と病理-』　金剛出版新社
加藤・保崎・笠原・宮本・小此木他編　1993　『新版　精神医学事典』　弘文堂
菊池・久保田・関口編　1985　『芥川龍之介事典』　明治書院
宮本顕治　1929　「『敗北』の文学-芥川龍之介氏の文學について-」『改造』　pp.101-117
滑川道夫　1956　「芥川龍之介の児童文学」『国文学解釈と鑑賞』23（8）　pp.52-57
成瀬哲生　1989　「芥川龍之介の『杜子春』-鉄冠子七絶考-」『徳島大学国語国文学』第2号 pp.20-29
新村出編　1995　『広辞苑』第四版　岩波書店
西岡晴彦　1984　「杜子春伝-その虚像と実像」『中国文化』42　pp.25-38
老松克博　2000　『アクティヴ・イマジネーション』　誠信書房
関口安義　1992　『芥川龍之介　闘いの生涯』　毎日新聞社
塚田満江　1956　「杜子春と山月記」『女子大国文』11　pp.20-25
内山知也　1985　「再論杜子春伝」『中国文化』43　pp.59-72
湯浅泰雄　1995　『気・修行・身体』　平河出版社

# A Study on " the Process of the Deepening Viewpoint " in Light of Depth Psychology
## - from "Toshishun" by AKUTAGAWA Ryunosuke -

ISHIKAWA Yuka

Based on my past studies , including interviews with six mothers rearing handicapped children, I have defined " the process of deepening viewpoints " as a process by which a person looks into his or her inner side more deeply , discovers bipolar thoughts within and selects one of them using his/her own will , while acknowledging the existence of the other thought . In my view, this procedure consists of five steps and follows a circular and spiral track , not a linear one.

If this process can be found at both the conscious and the unconscious levels in people's minds, it is likely to be found as well not only at the relatively conscious level but also at the relatively unconscious level. However , in past studies it seems that I have only dealt with the way of manifesting " the process of deepening viewpoints " found at the relatively conscious level . In this study, therefore, I intend to discuss this process found at the relatively unconscious level and , by analyzing literary works , examine the way in which it is manifested.

In this study I take up " Toshishun " by AKUTAGAWA Ryunosuke and try to analyze it from the viwpoint of depth psychology. In the course of the study, I examine how " the process of deepening viewpoints " is described in AKUTAGAWA's story, especially how the discourses (negotiations) between the leading character Toshishun and the " image " are portrayed , and what meaning these discourses (negotiations) have .

In addition , I will refer to the mental condition of AKUTAGAWA during the period in which this work was written. I also discuss why AKUTAGAWA wrote this story at that time and what he unconsciously expressed in the story ; that is , what "leaked" into the work. Lastly, I conclude that an interior experience of AKUTAGAWA, namely his "process of deepening viewpoints," is described in his " Toshishun."